

1. 研究目的

近年、和室は減少傾向にあり日本人の畳離れが深刻化している。(経済産業省工業統計では新畳出荷数が平成八年より年々減少している) また、畳の上に直接ソファや椅子などを置く西洋文化とのハイブリッドな使い方がされているなど、和室本来の使い方をされなくなっている現状がある。そこで、現代の文化や生活習慣に合わせた姿勢補助具を製作することで、和室文化の価値を見直す提案ができないかと考えた。

2. 調査と分析

2.1 日本人の床座姿勢について

近年の椅子のデザインを再考した矢田部英正著「椅子と日本人のからだ」という書籍がある(文献1)。矢田部氏は日本人の確立してきた床座の文化について、「そもそも日本では着物を正しく着れば着付けが骨盤を引き締め、無理なく背筋を伸ばす姿勢補助具となり、もたれの役割を果たすことがわかっている。」「座禅で床と尻との関係が30°になり、これが完成された美しい姿勢である」という指摘をしている。これを確かめるために実際に座禅体験などを行った。また同書では「江戸時代末期、ペリー来航時にアメリカ人に日本人が椅子を紹介された時に座り方がわからなかった」という文献を例に、この当時日本人は背もたれにもたれるということをしなかったことを指摘している。

2.2 “もたれ”による文化破壊の可能性

一方、西洋では直立姿勢でいることが多かった為、もたれることで直立状態を保つ“もたれ”という姿勢の文化があったのではないかと。近代化する中で西洋文化と共に入ってきたこの“もたれ”こそ最大の問題点であると着目した。

ここで、“もたれ”を取り入れた顕著な例として座椅子が挙げられる。座椅子は和室で最も使われている椅子として和室文化を守ってきたように思えるが、製作されたのは1963年からとかなり新しいものだと言える(文献2)。その後、約50年たった現在まで、日本人は床座で姿勢が保てなくなってしまうようだ。つまり、実際は“脚の無い椅子”により和室の文化が西洋の文化に壊されているのを黙認してきたのではないかと考えた。

3. コンセプトの立案

「現代人が無理なく美しい姿勢をとれること」

問題点として挙げた“もたれ”を作らないこと、そしてもたれがなくても長時間あぐらや正座を美しい姿勢のまま保てられるようにする。また、茶道や華道など和室文化を継承していくような一部の限られた人々だけではなく、あぐらや正座をかけない現代人が使うことも想定する。

4. デザイン展開

4.1 角度検証モデル

座禅に使われる座蒲に座った時に床と尻の間に生まれる30°という角度が、あぐらにおいても有効なのかを20°の座面と30°の座面と比較検証した。



結果、やはり30°の座面に250mmの深さで座った時に背骨がS時に湾曲した美しい姿勢になった。

4.2 正座とあぐらの姿勢がとれる中間モデル

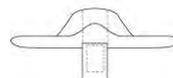


検証した結果、座面が滑りやすい、座面が高すぎるなどの問題点が浮上し、これをもとに最終モデルの製作をした。

5. 完成図



W: 540mm



D: 450mm



H: 285mm

6. 結論

完成モデルを検証した結果、普段床座をしない人でも無理なく美しい姿勢を保つことができた。もたれを使わないこの姿勢補助具によって和室での生活スタイルが見直され、しいては和室文化の継承に役立つことを期待するものである。

文献

- (1) 矢田部 英正 『椅子と日本人のからだ』
- (2) 天童木工, <http://www.tendo-mokko.co.jp/>